様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３５０７９３

研究課題名（和文）アダプテッド・スポーツを用いた学校体育の可能性

研究課題名（英文）Possibility of school physical education by "Adapted Sport"

研究代表者
内田　匡輔（Uchida, Kyosuke）

東海大学・体育学部・教授

研究者番号：００４０７９８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、全ての児童生徒が必要とする保健体育授業のあり方を提案する事を目的とした。
　まず対象となる特徴のある生徒には、先行研究と比較し「朝食喫食改善」「睡眠時間適正化」があった。一方で「メディア利用の長時間化」「メンタルヘルスの不安定さ」が明確になった。また教員への半構造化インタビュー調査より「生徒の脆弱なスポーツ体験」「体験のないスポーツの教材化の必要性」「指導者の主観」が明確になった。このような対象に対する授業として、工夫された体つくり運動やTT方式での授業は一定の効果があることを研修会を開催し確認した。また、パラスポーツを取り入れた授業実践も可能であった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to propose the way of health and physical education class which all students need.
For the students with the target characteristics, there were "improvement of breakfast eating" and " sleeping time optimization" compared to previous studies. On the other hand, "long-term use of media" and "instability of mental health" became clear. Also, from the semistructured interview survey for teachers, "students' vulnerable sports experience", "necessity of making teaching materials of unexperienced sports" and "subjectivity of leaders" became clear. As a lesson for such subjects, we held a workshop to hold that the devised body making exercise and the class in the Team Teaching method had certain effects. In addition, class practice incorporating para - sports was also possible.

研究分野：アダプテッド・スポーツ科学

キーワード：授業研究会　体育実技　共生社会　形成的授業評価　ユニバーサルデザイン

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は、すべての児童生徒が必要とする保健体育授業のあり方を提案する事を主たる目的としている。特に、アダプテッド・スポーツを用いた保健体育授業の展開が、児童生徒の障害や特徴、特性に則し、可能である事を示すことを目的とした研究である。

体育授業は、自立活動とは異なった教科である。しかしながら、特別な支援を必要とする生徒の保健体育は、「健康の保持増進」といった保健体育の一側面が強調され、本来の教科としての特徴が薄れている。また、支援学校ではない学校でも、体力の二極化や運動への参加の可否に大きな差がある中で、アダプテッド・スポーツ科学から新たな体育科教育の方向性を示す先進的な研究である。

２．研究の目的

本研究では、特徴のある生徒の体育授業の充実に向け、アダプテッド・スポーツを活用した授業実践を試みる。アダプテッド・スポーツは従来の「より速く、より高く、より強く」[1] といった評価軸にとらわれない、スポーツの新しい形である。

このようなスポーツの価値観を享受することが、健康だけにとらわれない豊かなスポーツライフの実現に向けた教科保健体育の本来の目的と言える。

1）藤田紀昭，インクルージョンの意義と授業づくりの視点，体育科教育 51 巻 8 号，大修館書店

３．研究の方法

本研究は、上記の目的を受けて、具体的には、授業の実践研究を行うことを目的としている。そのため、平成 26 年度には協力校の「実態調査」を、27、28 年度には「授業研究」を中心に、２つの研究調査を柱としている。

１）　協力校の実態調査

（１）調査対象について

調査対象は星槎グループの星槎国際高等学校 23 キャンパス、星槎学園キャンパス、星槎中学高等学校計 30 校の生徒を対象とした。

（２）調査期間

2014 年 8 月下旬に質問紙を送付、10 月下旬に返送の手順で実施した。

（３）調査方法

無記名選択式の質問紙調査を郵送法にて実施し、質問紙にあわせて、在籍生徒の確認をとった。

（４）質問紙について

本研究の質問紙は「子どもの生活リズム向上のための調査研究（東海大学子どもアクティブライフ委員会）」、「児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書」を参考とし生活習慣・運動習慣・メンタルヘルスの全 37 項目で構成した。

２）　協力校の授業研究

（１）授業研究の全体像

協力校における授業研究を合計 13 回実施した。2 回目から 10 回目までは、協力校における授業提案を中心に実施し、恒久的な授業研究を目指し、当該授業担当教員への指導助言、並びに部分的な授業提案を実施した。特に 10 回目は、本研究で重ねてきた授業研究を、協力グループ内で共通して課題ととらえるための授業研究を実施している。また 11 回から 13 回までは、アダプテッド・スポーツの考えを前面に押し出しながら授業研究を行うことを目的に、授業実践を行った。

（２）授業研究のデザイン

13 回の授業に関する研究は、「アダプテッド・スポーツを基本とした体育実技の研究授業（2～8 回　下記研究授業①～③含）」「星槎保健体育授業実践研究会（9，10、12 回）」「アダプテッド・スポーツを中心にした授業実践（11、13 回　）」とした。

４．研究成果

１）研究概要

本研究は、星槎グループ各校の協力をもとに進めることに特徴であった。

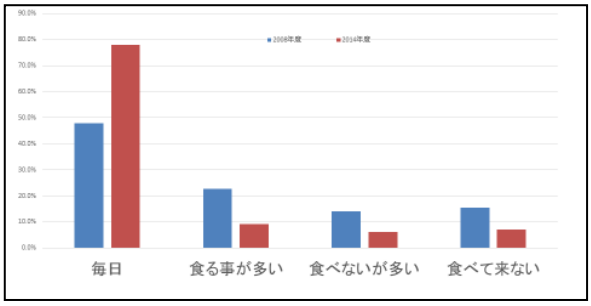
まず、初年度は協力校の実態を明確にすることとした。グループ全校舎に郵送法での質問紙調査を実施し、12校705名から回答を得ることができた。

2年目には、初年度の質問紙調査を精査し、対象校には「多動傾向の強さ」「運動実施が与える影響」があることを確認した上で、授業提案を行うなど授業実践を行った。

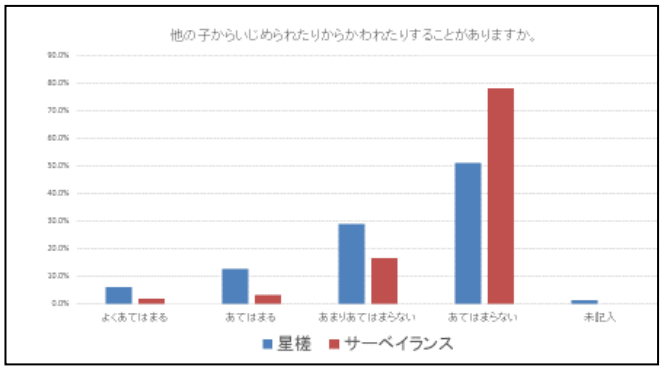
3年目には、授業実践をグループ全体で共有し、生徒の実態理解や、生徒の行動や動作特徴を分析し活用などを研修するために「星槎保健体育授業研修会」を2016年9月24日に開催した。

１）協力校の実態調査

協力校の実態として、「朝食喫食の改善」（図1）「睡眠時間の適正化」という結果が得られた。一方で「メディア利用の長時間化」「メンタルヘルスの不安定さ」（図2）も明らかになった。



【図1　朝食喫食の状況　】

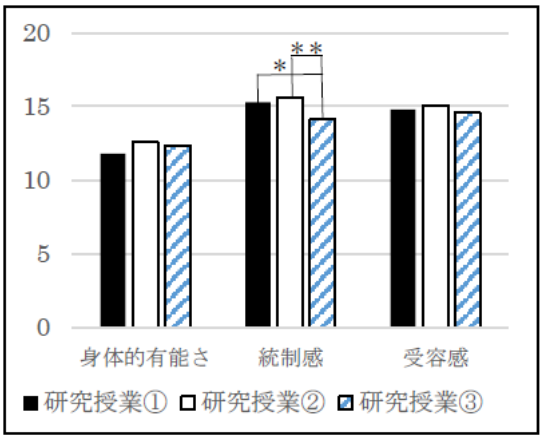


【図2　メンタルヘルスの様子　】

2008年度に実施した調査と比較し、グループ生徒の実態として「朝食喫食の改善」「睡眠時間の適正化」という結果が見られた一方で「メディア利用の長時間化」「メンタルヘルスの不安定さ」という状況が明確になった。また、こういった実態のある生徒を対象に、運動課題達成を目的とした授業実践に対して形成的授業評価や運動有能感調査をおこなった結果、中学2年生では高まる一方で、3年生では評価が伸び悩むという結果が得られた。

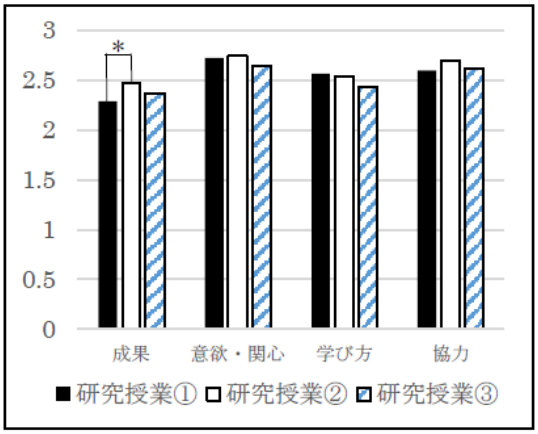
２）研究授業の成果について

図３　より、研究授業①と②では、形成的授業評価の成果因子が増加しており、有意差が見られた（$t(250)=2.17$, $p<.05$）。また、図2 より、研究授業①と③、研究授業②と③では、運動有能感の統制感因子がそれぞれ減少しており、有意差が見られた（$t(321)=1.09$, $p<.05$）（$t(326)=3.16$, $p<.01$）。



【図３　研究授業の形成的授業評価　】

研究授業①で実施したのは、「スポーツ鬼ごっこ」という内容であった、ここで見ら



【　図4　研究授業後の運動有能感　】

れた、形成的授業評価の上昇や肯定的意見の増加といった結果から、多様なニーズのある生徒にとって、体験のないスポーツ活動の教材化は有効であることが示された。

また研究授業③では、運動量に着目して授業を行った結果、統制感で減少があるという結果が得られた。

この実態を踏まえて、担当教諭への半構造化インタビューを実施し、「生徒の脆弱なスポーツ体験」という問題があることや、「体験のないスポーツの教材化の必要性」さらには「指導者の主観」が存在していることも明確になった。

こういった結果に対して、心拍数計や歩数計を用いた授業実践を行った(図5)。

これら授業実践の形成的授業評価では、

【図5 心拍数計-歩数計を用いた授業実践】

用いなかったときの授業と比較し、統計的な有意差を得ることはできなかった。すなわち、多様なニーズのある生徒にとって、機器を使用した自身の身体に関する計測は、表面的には影響するものの、授業評価には影響しないことが本研究で明らかになった。

他にも、生徒の実態をより正確に把握することや、健康に対する意識を効果的に高めること目的として、保健の授業に介入し、TT形式での授業実践も試験的に行った(図6)。

【図6　TT形式での保健授業の様子】

3）授業研究会について

2016年9月24日に、星槎保健体育授業実践研究会を実施した（図7）。

【図7　授業実践研究会の様子】

これまでの研究授業や授業実践研究会を通して得られた意見は以下の通りであった。

○　TT授業の具体的な検討の必要性
○　プリント資料の有効な活用
○　教え合い・学び合いの具体的な支援

この研修会での意見交換を通して、共生社会を目指すための授業のユニバーサルデザインとして、保健体育があるべき姿を確認し、パラスポーツを取り入れた授業実践を継続して行うなど、研究授業を重ねる必要性が明らかになった。

4）アダプテッド・スポーツの授業実践

実践内容は、ボッチャと車椅子バスケットであった。(図8，9)

【図8　ボッチャの様子　】

【図９　車いすバスケットの様子　】

アダプテッド・スポーツを中心とした、授業実践を通して以下のような結果を得た。

○　授業への積極的な参加姿勢を促す
○　パラスポーツについて知識を放す意識が芽生える
○　教師の教材観に影響する

アダプテッド・スポーツを用いた授業の形成的授業評価や運動有能感は、他の授業と比較し、統計的な差は見られなかった。

しかしながら、形成的授業評価では、2.6（評定 5)、と高いことから、アダプテッド・スポーツを用いた授業実践は、用いていない授業実践と比較し、高い評価を得ることが可能であることが明らかになった。

５．主な発表論文など

〔雑誌論文〕（計　２　件）

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

（1）内田匡輔：アダプテッド・スポーツを基本とした体育実技
日本体育学会アダプテッド・スポーツ専門領域，2（1）14　－　17，2016

（2）内田匡輔：子どものためのアダプテッド･スポーツ　子どもと発育発達, 13 (1) 2015

〔学会発表〕（計　３　件）

（1）内田匡輔：アダプテッド・スポーツを基本とした体育実技－多様なニーズのある生徒に対する体育実技授業の実践例－
日本体育学会第 67 回大会（大阪体育大学熊取キャンパス）アダプテッド.・スポーツ専門領域ポスター発表　2016 年 8 月 25 日

（2）内田匡輔、山田理音、横山果耶子：インクルーシブ教育における体育実技のあり方
第 37 回子どものからだと心・全国研究会議（日本体育大学世田谷キャンパス）ポスター発表　2015 年 12 月 12 日

（3）内田匡輔：特徴がある生徒の運動・生活習慣の傾向　－多様な生徒が通う学校の実態から－
日本体育学会第 66 回大会（国士舘大学世田谷キャンパス）　アダプテッド・スポーツ専門領域ポスター発表　2015 年 8 月 26 日

６．研究組織

(1)研究代表者

内田匡輔　（　UCHIDA,　Kyosuke）

東海大学・体育学部・教授

研究者番号：00407983

(2)研究協力者

・宮澤　保夫　（Miyazawa　Yasuo）
星槎グループ　会長

・脇屋　充　（Wakiya Mitsuru）
星槎国際高等学校　教育連携室

・　栗山　裕章　（Kuriyama Hiroaki）
星槎中学校・高等学校　副校長

・　塩谷　貴男　（Shioya Takao）
学校法人国際学園　副校長

・　佐藤　諒　（Sato　Ryo）
星槎中学校・高等学校　教諭

【他　１２名】